

## E. コシュミーデルのアスペクト論の軌跡

栗原成郎

### I

ポーランド生れの言語学者、エルヴィン・コシュミーデル博士（1895-1977）は1939年から約40年の永きに亘ってミュンヘン大学教授としてスラヴ文献学およびバルト文献学のゼミナールを指導し、またバイエルン科学アカデミー会員（1942年以降）、ヘルシンキ・フィン＝ウグール学会通信会員（1938年以降）、オーストリア科学アカデミー通信会員（1970年以降）、国際的学術雑誌《Die Welt der Slaven》（1956年創刊）の編集主幹として多彩な学術活動を展開し、西欧世界におけるスラヴ学の発達に多大な貢献をなした。

コシュミーデルの遺著『ロシア語』〔文献9〕はSiebert女史の編集協力により1978年に出版された。この書は教科書として編まれたものではあるが、決して初学者向きではなく、むしろロシア語の既修者がコシュミーデルの特異な文法解説と特別に工夫された練習問題を通じてこの言語の構造特性について理解を深め、知識を整理するためにふさわしい便覧と行うことができよう。この書の記述の流れのなかで最も目に立つ点は、スラヴ語学のうちで最も深遠な問題に属するアスペクト論とアクセント論に特別な力点が置かれ、多くのページがそのために割かれていることである。ことに動詞のアスペクトに関する記述にはこの文法カテゴリーをめぐっての著者の永年の思索の跡が投影されていて、思わずそこに目が向けられる。

コシュミーデルは自分のアスペクト理論に絶対的な自信を持っていた学者である。シレジア（シロンスク）生れのコシュミーデルは第1次世界大戦後故郷のブレスラウ（ヴロツワフ）大学で西洋古典学とスラヴ文献学を修め、1922年に博士号を取得した。ブレスラウ大学図書館に勤務のかたわら研鑽を積み、1926年にブレスラウ大学に『スラヴ語動詞のアスペクトに関する研究』という論文を提出して、"Habilitation"（大学教師資格）を取得した。この論文は2年後にドイツの比較言語学雑誌KZに掲載された〔文献1〕。コシュミーデルはアスペクト論者として学界にデビューしたのである。彼は1928年にはクラクフ大学で「アスペクトとは何か」と題する講義をし、1930年にリトアニアのヴィルノ（ヴィリニウス）大学に教授として招聘された。コシュミーデルのアスペクト理論の基礎をなす名著『ポーランド語動詞アスペクト理論概説。総合の試み』（1934）はヴィルノ大学の研究紀要の一冊として刊行された。現在は稀覯書であるこの大論文はロシア語訳（抄訳）〔文献15〕により大体的内容は知ることができるが、そのドイツ語による全訳がコシュミーデルの令嬢でスラヴ語学者のKäthe Schmid-Koschmiederの手によって準備中であることが予告されている〔9, 106〕。コシュミーデルのアスペクト研究の詳細な再検討はそのドイツ語訳の出版を待つことにして、ここでは前述の遺著の出版を契機として、彼の特異なアスペクト論に関する予備的な鳥瞰図を作っておきたい。

アスペクトを時間のカテゴリーのなかで捉えようとするコシュミーデルの独自の思考は、彼の研究活動の初期から晩年に至るまで一貫して変わっていない。遺著『ロシア語』における動詞のアスペクトの記述の基礎を成しているのは彼の円熟期の論文『アスペクトと時間』（1963）〔文献8〕である。

第5回国際スラヴィスト会議（ソフィア、1963年）のために準備されたこの論文は、アスペ

クトは時間のカテゴリーであるのか、それともなにか語彙的・意味的カテゴリーであるのか、という問題提起に始まり、アスペクトのカテゴリーが時間的性格を示す個々の用法を三部に分けて考究している。

コシュミーデルは、不完了体||完了体というアスペクト本来の対立の定義に関して学者間にいまだ大きな不一致があることを不満とし、本質的に重要なのは完了性 ( *Perfektivität* ) と不完了性 ( *Imperfektivität* ) の概念が「時間的に」 ( "*zeitlich*" ) 把握されるか「意味的に」 ( "*semantisch*" ) に把握されるかの問題である。と問い直す。その際、彼は "*semantisch*" は "*lexikalisch*" と同義と規定し、自身はアスペクトの概念の時間的基盤を示すべく努めて、問題を次の三点に限定して考察する。

1. 完了体||不完了体の対立の機能は意味的・語彙的差異ではない。
2. この機能は文法的であり、純粋に時間的性質を持つ。
3. アスペクトを“意味”に関係づける誤った定義は何に基づくのか。

第1部で彼は「状況型」 ( "*Situationstyp*" ) とよばれる統辞的構造モデルを設定し、《*Когда я вчера возвращался домой, я встретил Ивана на улице*》という状況型では動詞のアスペクトは "*Gleichzeitigkeit*" (「同時性」), 《*Когда возвратился, то нашел его письмо на столе*》という状況型では "*Vorzeitigkeit*" (「以前性」) という時間関係の機能が差異をもって現れることを指摘する。

第2部においては《 *всегда* 》タイプの時間的限定詞をもつ文を考察し、そこにおいてはアスペクトの交替の可能性は存在するが、現実的な現在において、すなわち、《 *Was tust du da?* 》 (《 *Что это ты делаешь?* 》) という間に対する答においてはつねに不完了体が現われ、アスペクトの交替が不可能になる時間的狀況を論究する。第3部は *Praeteritum narrativum* || *praesens historicum* の対立を扱う。

コシュミーデルはこれらのすべての場合においてアスペクトが時間的機能を果たすことを強調し、然るべき時間的コンテフストが然るべきアスペクトを条件づける、と主張する。彼は、ドスタールやマースロフらがアスペクトの機能として理解する *Totalität* || *Nichttotalität* (全一性||非全一性) の対立タイプを意味的に定義することは上述のアスペクトの用法において確証され得るものではない、と考える。コシュミーデルは、"*totalität*" なる概念は時間的に理解することも意味的に理解することも可能であり、もし時間的に解せば彼自身の定義に近づくものとなり、もし意味的に解せばそれは "*Vollendungsbedeutung*" (「完結性」) として古くから知られている概念に対する新たな命名にすぎない、と言う。

コシュミーデルに従えば、アスペクトのあらゆる虚構的・虚偽的意味対立の原因となっているのは、アスペクトの対立の形態論の指標が造語法上の指標と符合するという事実であり、まさにそのためにスラヴ人たちがそれぞれの母国語のスラヴ語においてアスペクトの対立がもっぱら文法的機能において現れる場合にすら、語彙的意味をアスペクト対立に帰属させる傾向にあるということである。

以下、『ロシア語』(1978)に見られる叙述に照準を合わせてコシュミーデルのアスペクト理解の独自の点を概観することにする。

## II

### 1. 状況型：持続 II 出現

完了体と不完了体とからなる動詞のアスペクトはラテン語におけるいわゆる 'relative Tempora' にきわめて類似した時間的経過の関係を表す。そのさい、不完了体は事態の当該時間における持続を表し、完了体は出現（発生）を表す。

(1) Когда я вчера возвращался домой, я встретил Ивана на улице.

(2) Когда я вернулся домой, я нашел его письмо на столе.

アスペクトの対立項は原則として同一の事態を表現するが、一定の条件のもとではいずれかのアスペクトが現れる。状況型(1)と(2)においてはアスペクトの交換はまったく不可能である。

(1) возвращался は「帰宅の途中」、「家路をたどりつつあるとき」("auf der Rückkehr", "auf dem Heimwege")で当該の時間における「帰る」という事態が「持続中」("im Währen")であることを表し、встретил という事態発生 ("Eintritt")との「同時性」を示す。それに対して(2)の вернулся は「帰宅後」("nach der Rückkehr", "nach dem Heimwege")を表し、事態の出現の「後」を示す。もし当事者の帰還が持続中ならば家のなかで机の上に手紙を発見するという出来事は起らない。帰宅は手紙の発見に時間的に先行する。(1)と(2)における動詞のアスペクトは帰還そのものの意味的な相違を表しているのではなく、「同時性」("Gleichzeitigkeit")か「以前性」("Vorzeitigkeit")かの時間関係を表している。アスペクトのペアを成す動詞は意味やスタイルによって相異なるのではなく、機能的に相異なるのである [15, 105-106/85/9, 106-107; 121-122]。

(3) Что бы ни было на заводе, Иван всегда в пять часов возвращается домой.

この場合、意味の相異なしに возвратится ないし вернется を用い得る。(1)と(2)の場合は二つのアスペクトは同一の事態、同一の動作を表しているが、統辞的には両者は置き換え得ないのに対して、(3)の場合には同一の事態を表しながら二つのアスペクトを置き換えて用いることが可能である。しかし、

(4) Куда ты идешь? — Возвращаюсь домой!

(5) Откуда она идет? — Она возвращается из фабрики.

においてはそのようなアスペクトの交換は不可能である。このように、ある場合には二つのアスペクトの使用が可能であり、ある場合にはそれが不可能であるが、その相異はどこにあるか。コシュミーデルは、二つのアスペクトの使用の可能性は両者の動詞の意味にあるのではなく、(4)と(5)における答の文が *hic et nunc* (いま・ここ)の時間と空間を持つのに対して(3)の *всегда* のある文が「時間外性」("Außerzeitlichkeit")を持つことにある、と考え、ここにおいても時間的要素を認めるのである。

(1)の状況型においては возвращался と встретил のアスペクトを意味された時間関を変更せずに置き換えることは不可能である。「帰還」は不完了体で「出会い」は完了体でなければならないが、きわめてしばしば用いられるいわゆる "Praesens historicum"においては

(6) Когда я возвращаюсь домой, я встречаю Ивана на улице.

となり、「帰還」も「出会い」も不完了体となり、それ以外の置換は不可能となる。しかし過去の叙述と歴史的現在において扱われているのは同一の出来事であり、意味的な相異はなく、したがって相異は意味にではなく時間にある：**Praeteritum narrativeum** || **Praesens historicum** [8, 5]。

持続 || 出現の状況型において出現は完了体でなければならないが、**praesens historicum** の用法においてはそれが不完了体で表わされることは学習上も注意を要する。

(7) **Вчера я иду по улице домой, и вдруг непосредственно передо мной с крыши падает черепица.**

ここにおいては期待される完了体 **упадет** の代りに今日の標準語では不完了体の使用が義務的であり、完了体の使用はブイリーナなどのフォーフロアの言語に限られる [9, 162]。

時制の体系のなかにない命令法においては“持続 || 出現”という状況型（時間関係型）のアスペクトの区別は本来、存在理由を持たない。

(8) **Когда вернешься домой, пиши мне еженедельно.**

(9) **Когда вернешься домой, напиши мне сейчас же открытки.**

(8)では一般性のある要求が、(9)では一回性が表現されているにすぎない [8, 214]。

## 2. 'hic et nunc' の現在

「あらゆる時間表象のうちでつねに現在であるのは "Was tust du da?"（「きみはそこで何をしているのか」）という問に対する答という意味での **hic et nunc**（いま・ここ）の現在である。それは持続である。それゆえにそのような現在は不完了体で表現されなければならない。これはアスペクト組織のきわめて本質的な点である」 [8, 150]。

これはコシュミーデルが確信をもって主張して止まなかったテーゼである。彼はかつて次のように書いた。「外的な基準がないにもかかわらず、ポーランド人は所与の動詞が完了体であるか不完了体であるかをつねに決定することができる。それは「**Co tam robisz?**」（「きみはそこで何をしているのか」）という問に対して決して完了体では答えることができないからである。したがって、もしその問に対して動詞で答えることができるならば、その動詞は不完了体であり、できないならば完了体である。所与の動詞のアスペクトの決定はポーランド人にとってなんの困難も感じさせない。それはここで決定的なのは「**Co tam robisz?**」の問に対して答える際の語感があるからである。しかし、このような語感を持たない外国人にとっては辞書のみが助けとなる」 [15, 114]。

「**Co tam robisz?**」の問に対する答は発話時点においてわれわれが当該の動詞によって表される動作の実現の過程のなかにあることを意味する。われわれはいましたがその動作にかかわっていて、さらにその動作にかかわってゆくことを確認する。かくして、この場合、話題になっている事実は現実的なものであり、具体的に行われるものであって、抽象的なものでも単に可能なものでもない。その事実はまさに発話時点において実現され、われわれはまさにそのためにそれを表現しなければならない」 [15, 129]。

このことはロシア語（スラヴ語）の完了体の現在形が現在時を示さず、未来時の意味しか持たないことと深くかかわっている。コシュミーデルは、完了体が現在を持ち得ないことはアスペクトが時間に関係があることの証拠である、と考え、アスペクトが時間概念に関係がないように主張するのは誤謬である、と言う。

コシュミーデルは「時間の位置をもつ」( "zeitstellig" ) 事実と「時間の位置をもたない」( "zeitstellenlos" ) 事実とを対比させて、アスペクトの時間的機能の問題として考察した。時間的關係は具体的な事実においてのみ生じ、抽象的な事実においては時間線上にその位置がないから時間的關係が生じる基盤がない。この二つのタイプの事実の峻別は論理上の要請である。しかし、インド・ヨーロッパ語には抽象的事実を表すための動詞の特別な文法カテゴリーがないから、既存の文法カテゴリーが用いられるが、そのさいその原初的な機能は失われる。

私がもし実際に自分の手を洗えば、この事実はある時間、ある日に実現され、具体的・個別的である。しかし諺表現 *Рука руку моет* (*Eine Hand wäscht die andere*) においては、事実は一定の時に実現されるのではなく、個別の時間の位置の価値を持たない抽象である [15, 131/8, 8]。

時間の位置を持つ事実の現在時に完了体動詞は使用し得ないが、時間の位置を持たない事実の現在に完了体を使用する例外が多く見られるのはこのためである。

動詞の現在形が用いられながら 'hic et nunc' の現在に言及しない場合がいくつかある。これらはいずれも時間的位置の価値を持たない事実を表す。

(a) *Praesens historicum*: 過去を表す。Когда я вчера выхожу из дому, я встречаю знакомого (= когда я вчера выходил из дому, я встретил знакомого).

(b) *Praesens propheticum / praes. pro futuro*: 未来を表す。Через год он уезжает в Англию.

(c) *Praesens extratemporale*: 時間の位置を持たない事実で、「いま・この現在」を表現しない。*Рука руку моет*.

人間の精神に関わりのある事実の大部分は時間のなかに個別的な有限な時間的所在価値 ("Zeitstellenwert") を持つ。それらは史書に描かれるペロポネソス戦争、コロンブスのアメリカ大陸発見、ゲーテのイタリア紀行のように年代学的に暦の上で定立し得る一定の時点、個々の時間的位置の価値をもつ。それに対して、数学の定理、諺、自然科学の普通妥当文などは出来事として生じた事実ではなく、個別的な時間的所在価値を持たない [5, 31-44/9, 151]。

(d) *Praesens imperativum*: 「喚起」( "Auslösung" ) を要求する命令。"Du gehst mir jetzt gleich in die Stadt und kaufst ein Brot".

(e) *Praesens coincidens effectivum*: "Ich ernenne dich hiermit zu meinem Stellvertreter".

(「私は貴君をここに私の代理人に任ず」)。これは喚起 (Auslösung) であるが、コシュミーデルはこの 'hiermit' - *Präsens* を "Koinzidenzfall" と名づける。これは hic et nunc の現在ではあるが、"Was tust du da?" の問に対する答の意味でのそれではない。ここでは、動詞形態の言表が、発話と同時に持続している動作内容を伝えているのではなく、その内容の執行の「自己実現」のなかにあるという特別な場合が問題となっている。"Ich ernenne dich hiermit zu meinem Stellvertreter" はこの発話によって実現される任命である。それに対して "Ich schreibe jetzt gerade einen Brief". (「私はいまちょうど手紙を書いているところだ」) は書くことの実現ではなく、それについて

の報告にすぎない。ここにおいて 'hiermit' と 'gerade' とは排他的関係にある。'hiermit' Präsens では発話と行為が符合するのに対して、'gerade' Präsens では一つの同時的行為によってのみ動作が実現される。この場合には 'verba dicendi' が用いられることが多い [9, 152-153]。

この問題についてはコシュミーデルは1926年以來しばしば論じている。この「符合の場合」の現在は、「私はいま読んでいる」のような発話と同時の動作を表さないで、当該の動作（行為）は書式を発音することによって実現され、「喚起」される。'Koinzidenzfall' は言語の叙述機能に属するのではなくて、喚起機能に属するものであり、叙述のカテゴリーはもともとアスペクトから失われている。事柄の抽象性をコシュミーデルは一例を挙げて説明している。

私のところへポーランドから客たちが来たので、私はいくらか儀礼的にポーランド語で客に、応接間におはいいろください、と言う。私の弟はポーランド語が分からないので、"Nun bitte die Herren doch endlich ins Empfangszimmer!"

（「まあともかくお客さまに客間におはいいろがおう」）と私に言う。それに対して、私は "Ich bitte sie ja schon gerade herein".

（「いままさにおはいいろくださいと彼らにおねがいしているところだ」）と言う。この "ich bitte" は報告の現在 (Berichtspräsens) で上述の意味での 'hic et nunc' の現在である。しかし私が自分で客を招き入れて彼らに "Meine Herren, ich bitte sie hiermit ins Empfangszimmer".

（「さあみなさん、どうぞ応接間におはいいろください」）と言うとき、'hiermit' としか言えず、それは報告の現在ではなく、願いのもの、すなわち、その実行である [8, 10]。

この(a)~(e)の場合におけるアスペクトの用法は理論的文法によっても実用的文法によっても十分に評価されていないので、ロシア語学習にとってきわめて重要な問題である、とコシュミーデルは考えている [9, 155]。

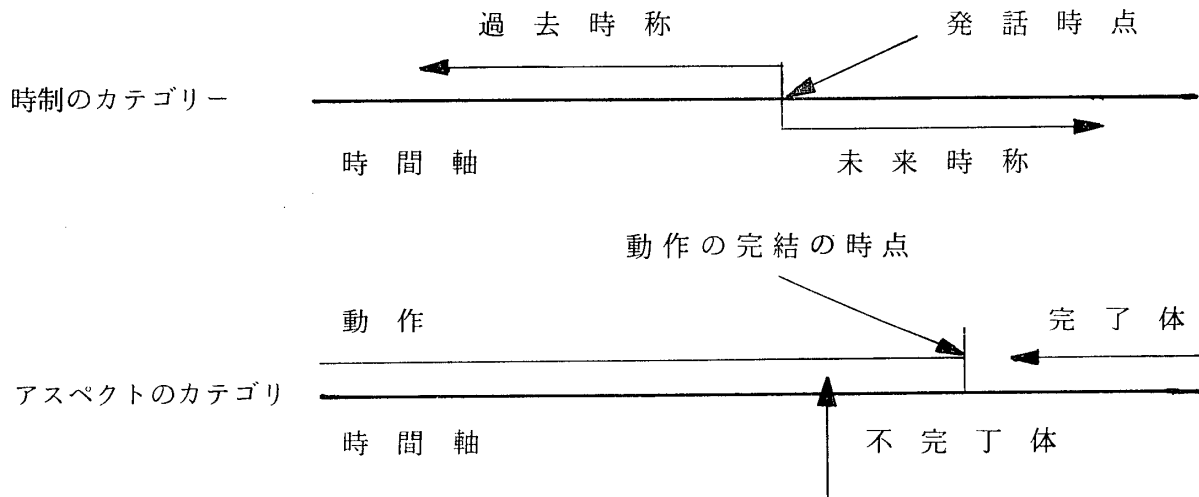
### 3. 時間の方向関係 - 1) 過去から未来へ、2) 未来から過去へ

時間という概念は運動の要因に基づいている。そして運動の概念は方向の概念と結びついている。動作の出現の過程の知覚においては二つの可能な方向がある。時間の線に沿って発話主体者が過去から未来へ移行するか、それとも時間の線上の諸点が発話主体者を通過して未来から過去へ移行するか、のいずれかである。

コシュミーデルは、二つのアスペクトの差異は動詞によって表される動作に対する発話主体者の態度にある、と考えた。その態度は二つの異なる方法で表される。1) 発話主体者は動作の経過のなかに自分自身を置くことができる。すなわち、彼は自分自身または他者を時間的位置に関係づけて観察し、発話時間を動詞によって表される動作の時間と同一視することができる、この動作の観方に立つと、過去から現在へさらに未来へと流れる発話の時間は動詞の動作の時間（それも同様に過去から未来に向って同じ方向に流れる）と平行するものとして観られる。これは不完了体である。《 Co tam robisz? 》という問に対する答においては過去から未来への方向関係が明瞭に現れている。2) 一方、完了体の場合には、発話主体者は動作の経過の外側に位置している。彼は時間的位置を自分に関係づけて観察するのであって、動作を動作の行われる時と異なる時間から、すなわち動作に後行する時点から観る傍観者の態度をとる（そのさい、

動作が過去に属するか未来に属するかはほとんど重要性をもたない)。発話主体者は動作をなにか自分のかなたに位置づけられたものとして観る。コシュミーデルはこの動作の観方を「未来から過去へ向う相対的態度」あるいは「未来から過去への方向の相対性」とよんだ [3, 38/10, 307]。

ポーランドの言語学者ミレフスキは名著『言語学』においてこのコシュミーデルの理解に基づくアスペクトの方向関係をテンスとの関連において明解に図式化している。



ミレフスキはアスペクトのカテゴリーと時制のカテゴリーとの関連を説明して次のように言う。(ロシア語の例は栗原が補ったものである)

「時制とアスペクトのカテゴリーは文を時間のなかに置く。時制のカテゴリーの標示者は発話行為の時間から、すなわち、言わば、時間のなかで話す話者の時間的観点から時間に言及し、過去を示すか (czytałem / я читал), 未来を示すか (będę czytał / буду читать) する。現在時称は対立の無標項である。それは特別な方向を示さず、過去でも未来でもないものを含む。實際上、この時称は二つの異なる事柄を指示する。すなわち、発話行為と同時の行為 (siadam / я сижу), あるいは過去をも未来をも包含し得る恒常的な活動 (zeimia krąży dookoła słońca / земля вертисся вокруг солнца)。それに対して、アスペクトの標示者は、発話行為の時間には関係がないが、動詞によって表された動作が完結する時点に関係する時間から時間を指示する。完了体の形態は動作の完結のあとに位置する過去の時を指示するので、われわれはそれをなにか過ぎ去ったこと (sob przeszłego) のように見るのである - przyczytałem / я прочитал, przeczytam / я прочитаю。

一方、不完了体においては、われわれは思考のなかで自分を動作の完結の時点の前に置き、その動作を展開するものとして捉える - czytałem / я читал, czytam / я читаю, będę czytał / буду читать。このように時制とアスペクトのカテゴリーは文の動作の時間のなかの位置を記述する」 [14, 100-101]。

コシュミーデルのアスペクト論に同調する者は多くはない。彼がスラヴ語の動詞に固有なアスペクトを時制組織の発達した西ヨーロッパ諸言語の所有者に(とくにドイツ人に)理解させるために、時間との関係を強調しすぎる、という批判もあろう。しかし、アスペクトを動詞の無時間

的なエネルギー量の表現と観ることには無理がある。アスペクトは時制の体系のなかに置かれてはじめて機能する。アスペクトを時間的カテゴリーとつねに不可分なものとするコシュミーデルの観方はむしろ健全と言うべきであろう。その点、アスペクトとテンスの密接な関連を、発話時点、言及された動作の時点、発話主体者が自分が言及している動作を観る時点の三つの時点から整理し、明確化したサファレヴィッチの研究〔文献10〕はコシュミーデルのアスペクト論の延長線上にある一つの成果として注目すべきものであろう。

< 参考文献 >

1. Koschmieder E., Studien zum slavischen Verbalaspekte. 1/11 KZ 55, 1928, s.280-304/56, 1929, s.78-105.
2. ----- Zeitbezug und Sprache. (Wissenschaftliche Grundfragen, Breslau 11). Leipzig-Berlin, 1929, 1971<sup>2</sup>.
3. ----- Nauka o aspektach czasownika polskiego w zarysie. Próba syntezy. In: "Rozprawy i Materjały Wydziału Tow. Przyjaciół Nauk w Wilnie", Tom V, Zeszyt 2, Wilno, 1934.
4. ----- Zu den Grundfragen der Aspekte. IF 53, 1935, s.280-300.
5. ----- Der Begriff des "Zeitstellenwerts" in der Lehre vom "Verbalaspekt" und "Tempus". WdS1 5, 1960, s.31-44.
6. ----- Der Verbalaspekt im Russischen. (Gemeinschaftl. m. W. Mittler). In: Mitteilungsblatt des Allgemeinen Dt. Neuphilologenverb. 14, 1961, s.77-80.
7. ----- Zur Definition und Benennung sprachlicher Zeichen und ihrer Funktionen. 1/11. WdS1 6, 1961, s.419-421/7, 1962, s.28-44.
8. ----- Aspekt und Zeit. "Slawistische Studien". Opera slavica 4. Göttingen, 1963, s. 1-22.
9. ----- Das Russische. Ein Handbuch für den Studierenden. Bearbeitet von Helga Tatjana Siebert. Symbolae Slavicae 3. Frankfurt am Main, Bern, Las Vegas, 1978.
10. Safarewicz J., Note sur l'aspect verbal en slave et en indo-européen. In: Studia językoznawcze. Warszawa, 1967, str. 307-315.
11. Piernikarski C., Typy opozycji aspektowych czasownika polskiego na tle słowiańskich. Wrocław, e.a., 1969.



12. Śmiech W., Funkcje aspektów czasownikowych we współczesnym języku ogólnopolskim. Łódź, 1971.
13. Czochrański J., Verbalaspekt und Tempussystem im Deutschen und Polnischen. Eine konfrontative Darstellung. Warszawa, 1975.
14. Milewski T., Językoznawstwo. Warszawa, 1976.
15. Вопросы глагольного вида. Сборник. род. ред. Ю.С. Маслова. М., 1962.

\* \* \*

KZ = Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen, begründet von A. Kuhn, Berlin 1852ff.

IF = Indogermanische Forschungen, Strassburg, 1892ff.

WdSl = Die Welt der Slaven, Wiesbaden, 1956ff.